

因果的トロープ主義の擁護

海田大輔 (Daisuke Kaida)

関西大学、京都光華女子大学

ワークショップの課題は、「性質とは何か」という問題に因果性の観点から光を当てる、というものである。本提題において私は、「性質の因果説」の可能性を追求することを通して、その課題に答えたい。

性質の因果説は、もっとも一般的には、次のように主張する。すなわち、性質は、それがその所有者に与える因果的力によって本質的に特徴づけられる。この一般的な主張をどう解釈するかに応じて、因果説は大きく二つのバージョンに分類することができる。弱いバージョンは、性質はその因果的力によって個別化されるとだけ主張し、性質が因果的力によって尽くされるとまでは主張しない。それに対して、強いバージョンは、性質は因果的力（の集合）に他ならないと主張する。

ここで注意しなければならないのは、性質の因果説は「性質 F が、（別の性質 G でなく）性質 F であるのは何によってか？」という問いに答える理論だということである。「性質とは普遍者なのか、トロープの集合なのか、それとも可能的な個物の集合なのか？」といった一般的な問いに性質の因果説が直接的な答えを与えているわけではない。しかし、因果性概念についてどういった立場をとるかということに応じて、性質の因果説が後者の一般的な問いにどう答えるべきかということも決まってくることになる。

本提題は、まず、以上のように状況を整理したうえで、性質の因果説のとりうるさまざまな選択肢を確認する。次に、そうした可能な選択肢の中の特定のバージョン（因果的トロープ主義）を定式化し、それを擁護することを試みる。因果的トロープ主義とは、次のような主張である。すなわち、（1）性質は因果的力を本質的に持つ、のみならず、因果的力の集合に還元される。（2）性質はトロープの集合である。

因果的トロープ主義を主張する論拠は、おおむね次のとおりである。「性質はその因果的力を偶然的にのみ持つ」とするヒューム主義は、性質について「裸の個体」を導入する立場ととらえることができる。ところが、たとえ実体について「裸の個体」を導入するメリットが主張できるとしても、性質について同様の議論を展開することはできない。したがって、ヒューム主義は重大な難点をもつ。また、この点においては、「弱いバージョン」の因果説も同様の欠陥を持つ。一方、因果性概念についての考察からは、因果性の *singularism* をとるべき強い理由があることが示される。「強いバージョン」の因果説で、しかも因果性の *singularism* と調和する理論として、因果的トロープ主義がもっとも有望であると考えられる。

因果的トロープ主義に対しては次のような批判が考えられる。（1）因果的力のようなアイテムを存在者のリストに加えるのは節約の原理に反する、（2）因果的力が常に潜在したままで決して顕在化しないという受け入れがたい世界像が帰結する、（3）性質の個別化が不可能になる。これらに対しても、できるかぎり有効な反論を試みたい。